



第 41 回（平成 21 年 9 月 9 日）定例会の研究発表要旨

「戦後の青年団活動」

富丘 山本淳一氏



「昭和 15 年 3 月、留萌から転校して、今日まで 70 年手稲に住んでいる。昔と違って人とのふれ合いが希薄になって、田舎ぐらしに郷愁を感じる思いもあるが、今日は、手稲の昔話を思い出しながら話してみたい」

と、3 つのテーマ〈町村農場時代〉〈少年期〉〈戦後の青年団〉をあげて話を切り出しましたが、山本さんは、さながら手稲の「語り部」のように、昔を今によみがえらせながら、淀みのない口調で、持ち時間の 70 分をあっという間に使い切り、なお物足りない面持ちでした。

〈町村農場時代〉というのは、父上（◎茂氏 — 「富丘今昔物語」の著者）と少年時代に一緒に働いた場所で「町村敬貴氏が 大正 6 年にアメリカから帰り、石狩樽川に 40 万坪の農場を開設し、牛を飼った。父は翌大正 7 年、17 歳でその牧場の実習生第 1 号となった。牛の扱いを知らずに入った父は、それでも“牧草づくり”“牧舎づくり”など 10 年間苦勞を積んだ。昭和 3 年に町村農場が江別の対雁に移転したのを機に、一旦離れて留萌で結婚し、4 人の子供をもうけた。しかし、終戦間際、岩見澤の空農（現岩見沢農業高校）が陸軍に徴収された折、町村農場が多勢の生徒を引き受けたことから、父は頼まれてその手助けに入り、また、牛飼いに三昧に。しかし、畑作、馬扱いなどは不得手で、逆に私はそれが得意。町村さんから声がかかり、飛んでいって手伝い、送迎用の馬車を引くトロツタ種の馬を扱ったのが楽しい思い出です。

〈少年期〉

「母親は、町村さんの近くで育った人で、三樽別に農業を止める人がいるから来ないか、と誘われ、留萌から手稲に移り住んだ（昭和 15 年）。引越して翌年、大東亜戦争が始まり、私は援農に駆り出されたが、草と作物との区別がつかず、作物の方をムシって怒られた苦い思い出もある。終戦近くの昭和 20 年 2 月、手稲山の裏側“平和の滝”のあたり、うっそうとしていたトドマツを切ってその油を採る仕事に動員させられた（20 名位）。その油は飛行機を飛ばす燃料に使うのだという。掘建て小屋の寒さに耐えながら、原始的な方法で、それも 40 日間に、ドラム缶 2 本位の油を採ったが、その油は飛行機に使われた形跡はなく、どこかに消えてしまった。これも少年期の貴重な体験でした。」

〈青年団〉

「戦後、農業を継いだ者は、みんな青年団に入った。青年団は陸上競技、文化祭、卓球大会、相撲大会などのイベントを主催し、また、他団体と交流する活発な時代でした。

毎年、7/8 は馬頭さん（富丘馬頭観世音）のお祭りで、青年団が総出で舞台をつくり、芝居小屋をつくり、そして、劇、踊り、歌などを披露した。素人の集まりだから、大変だったが、私は子役で出演し、アンコールを貰った嬉しい思い出もある。この馬頭さんの祭りも次第に衰退し、今年の 7/8 に参拝に見えた人は、僅か 3 人位で、いつかお参りに来る人もいなくなる気がして淋しい。青年団の「陸上記録大会」も忘れられないイベントだった。私は 18 歳頃から走って、全道大会にも出場したことがあります。手稲連合青年団の大会で、富丘が 5 連覇したことは忘れられません。

私は、昭和 30 年 2 月 23 日に結婚しました。23 歳で、副団長の時でした。この結婚式は会費制（400 円）で、役場の議事堂を借りて行なわれ、これが「新生活運動の結婚式」として、新聞に大きく報道されました。はじめ父は、この会費制に反対でしたが、母が乙黒さんに説得を頼んだ一幕もありました。

昔の資料は、物置に仕舞って置いたらネズミに食い荒らされて、残っているのは、今お話しした様な断片的な記憶だけです。」

[文責：國井]

「小樽・縄文人と文学碑を訪ねる」研修視察ツアーを終えて

西区八軒 條野雄一 会員

9月12日(土)、37名の参加者、天気にも恵まれ区民センター前を出発、竹田輝雄先生(北海道文化財保護協会副会長、日本考古学協会会員)の案内により、バスは一路小樽へ向かう。奥沢にある小林多喜二の墓、古い建造物が立ち並ぶ市街地、北のウォール街、運河沿いに面した倉庫群、小樽総合博物館運河館、旧日本郵船(株)小樽支店、手宮洞窟を見学し、旧白鳥番屋にて休息と食事をとった。昼からは、忍路環状列石、フゴッペ洞窟、帰路は田中酒造亀甲蔵を見学、無事夕方区民センター前に到着した。

小樽が最も輝いていた時代へタイムスリップしたかのような風景の中で運河沿倉庫群の前を沢山の観光客が歩いていた。すずかけの街路樹に包まれた北のウォール街として栄えた色内地区、旧三菱銀行小樽支店、旧北海道銀行本店。旧北海道拓殖銀行小樽支店。旧三井銀行は帝国銀行～三井銀行～太陽神戸銀行と数々の変遷をたどって「さくら銀行小樽支店」として営業、中央の大手銀行や地元銀行の本・支店の建造物が立ち並ぶなか、旧日本銀行(金融資料館)が公開され、壁にはアイヌの守神「シマフクロウ」が見守っていた。運河に面した石造りの倉庫群のなかに大きな鯨を抱き運河群シンボルともなっている旧小樽倉庫が昭和60年より小樽総合博物館として、日本海最大の商業都市として栄えた小樽、海運、ニシン漁で巨万の富を得、北海道の文化と経済の中心として栄えた小樽、縄文時代の遺跡など貴重な資料が展示されていた。車窓より旧日本郵船(株)小樽支店の建物を見学、明治39年11月13日、日露国境画定会議が2階会議室で開かれ、歴史的舞台として選ばれた建物は、国指定重要文化財として保存されていた。昭和31年より小樽博物館として公開されていたが、現在は旧小樽倉庫に席をゆずっている。ゴロタの丘に建つ伊藤整の文学碑の前で集合写真を撮る。碑には「海の拾児」私は浪の音を守唄にして眠る……と刻まれ、日本文学界に大きな足跡を残した伊藤整(1905～1969)「雪明りの路」「チャタレイ夫人の恋人」、プロレタリア文学鬼才と云われた小林多喜二(1903～1933)「蟹工船」「不在地主」同時代に育ち、小樽高商の同窓として、違った道を歩んでいった2人の作家は、小樽の代表的な作家として、伝えられていた。「小樽のひとよ」(二人で歩いた塩谷の浜辺、偲べば懐かし、古代の文字よ……と唄われた「手宮洞窟」「フゴッペ洞窟」、慶応2年に発見され、凝灰岩に彫まれた文字? 絵? 偽刻説まで出、大きな議論を巻き起こしたが、昭和25年フゴッペ洞窟が発見され、偽説は否定され、現在はカプセルで保存されていた。暗い展示室内の岩に彫られた絵? 前庭には貝層、灰層砂層の互層などがあり、洞窟で何が行なわれていたのか? この時代北海道は豊かな自然、遠く渤海迄続く文化圏が基づかれていたと云う説明には、びっくりするものがあつた。このような彫刻をもつ洞窟遺跡は国内でフゴッペ、手宮のみ、とのこと。現在国指定史跡として大切に保存されている。今回もっとも謎多き遺跡は忍路環状列石であつた。縄文時代後期(およそ3500年前)の遺跡との事だが、ゆるやかな丘を、平らな面に造成し、南北33m、東西22mの楕円形に石を配置して造られていた。何の目的で、大きな石を立て、楕円形に立てられているのか? 大きな石と石が、肩をよせあつて、ささやき合うように、また野原に腰をおろし輪になって語り合っているかのようにも見える。墳墓遺跡・宗教的遺跡・時を計る遺跡なのか、UFO関連施設なのか、色々な説が出てきそうである。いったい何の為に使われた遺跡なのか、縄文人は何を私達に伝えようとしているのか、現在国指定史跡として大切に保存されている。古代ロマンの遺跡をめぐる旅、明治

から大正、昭和にかけて繁栄した「港湾都市小樽」が残した遺産をめぐる旅であつた。

最後に、案内していただいた竹田先生、バス運行に便宜を図って下さった、むすめやホールていね・斉藤寿早さんには深く感謝するとともに、今後よろしくお願ひ致します。

次回の予定

次回(11月11日)は、元北海道教育大学教授・鈴江英一氏の講演「戸長役場から2級村町へ～「手稲村」誕生のころの北海自治制度～」と「手稲区歴史ホームページ」の観賞を予定しております。

